

校長のマネジメントによる組織の活性化： 学校教育目標の具現化を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-08-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永谷, 彰啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00029210

校長のマネジメントによる組織の活性化

学校教育目標の具現化を通して

永谷 彰啓

1. 学校教育目標の具現化

組織を活性化させていくためには、より具体的な目標を共通理解の元に設定し、具体的な効果が現れるような実践を進めて行くことである。職員全員がより具体的な目標を持ち、意欲を持って取り組もうとすると、必然的にその組織は活性化していく。

そこで、以前に校長として勤務していた学校の、学校経営方針に基づいて、どのように学校教育目標を具現化していったかを述べていく。

重点目標や重点努力事項を提案するときには、できるだけ具体的に提案していくことにしている。

(1) 25年度の重点目標

- | |
|-------------|
| ①元気のよい挨拶や返事 |
| ②教育相談の充実 |
| ③基礎・基本の定着 |
| ④学びがいのある授業 |
| ⑤体力の向上 |
| ⑥生活力の向上 |
| ⑦職員研修の充実 |
| ⑧家庭・地域との連携 |

(2) 25年度の重点努力事項

①元気のよい挨拶や返事

- ・毎朝、校門前や玄関前にて挨拶運動などを実施することにより、自分から進んで挨拶する意識を高める。
- ・朝礼や集会、式などの全校の場で、挨拶や返事、

発表の場の機会を持ち、大勢の前で発表できる力をつける。

②教育相談の充実

- ・アンテナ会や現職教育により、気がかりな児童の連絡会を持ち、共通理解を図る。
- ・気がかりな子に対して、保護者を交えての支援会議を積極的に持つ。
- ・1・2学期に、児童へのアンケート（あったかアンケート）をもとに、カウンセリング週間を実施し、児童理解に努め、いじめ防止、不登校対策にもつなげる。

③基礎・基本の定着

- ・国語・算数の学力検査を実施し、学力の定着度や課題を明らかにし、指導の方針を立てる。
- ・6・7月、11・12月を学力充実月間と設定し、家庭学習の手引きなどを利用し、学習習慣アップ作戦を展開する。
- ・毎月末や2・3学期始業式に漢字や計算を中心とするテストを実施することにより、基礎的な力の定着を図ると同時に、児童に目標を持たせ、学習の意欲を高める。

④学びがいのある授業

- ・一人が年3回以上の研究授業を公開したり、学年1回は部会別や全体研究授業を実施することにより、授業研究を充実していく。
- ・1・2学期に国語や算数の模範授業会を実施することにより、授業力アップを目指す。

- ・複数学級の特徴を生かし、他クラスとの交換授業、事前・事後研究授業などを進める。

⑤体力の向上

- ・週1～2回、業間運動を実施し、体力の向上を目指す。
- ・マラソン大会（春と秋）を実施し、伸び率の表彰も行うことによって、運動の意欲を高める。
- ・わくわくタイム（水曜日給食後清掃なし）などで、遊びを中心に体を動かし、楽しみながら体力の向上を目指す。

⑥生活力の向上

- ・4月の生活実態調査をもとに、生活の課題を明らかにする。
- ・各学期始めや長期休業中に、生活ふり回りカードをつけることにより、普段の生活習慣を点検し、基本的な生活習慣を身につけさせる。
- ・テレビやゲームの時間の減少を目指すために、年2回（6・7月、11・12月）ノーテレビ・ノーゲームデーに重点的に取り組む。
- ・交通安全教室、防犯教室などを実施し、「自分の命は自分で守る」意識を身につけさせる。

⑦職員研修の充実

- ・毎週月・木曜日は、職員会、研究会、学年会、現職教育などで研修の場を持つ。
- ・研究部会、生徒指導部会、教育相談部会などの部会を充実させていく。
- ・学力充実、情報教育、教育相談、メンタルヘルスなどの研修会を持つ。
- ・内部評価、自己評価を行い、教育活動や指導力の点検を行う。

⑧家庭・地域との連携

- ・学校だよりやホームページ等により、学校の教育内容を積極的に開示・提供する。
- ・教育活動や学校運営の状況を、保護者を含めて評価し、結果を公表していく。
- ・見守り隊、読み聞かせ、学習支援などのスクールボランティアの活動を充実させる。
- ・小中連携、保幼小連携を積極的に進めていく。

2. 組織の活性化のための取り組み

(1)学校全体の取り組み

子どもの実態から明らかになった課題に対して、学校全体で取り組むことによって、全職員、全校生が一丸となって取り組むことができるので、自ずと組織の活性化につながる。ここでは、家庭でのテレビやゲームの時間の多さや、家庭学習の定着が弱いという課題に対する取組を紹介する。

a. ノーテレビ・ノーゲームデー

4月に全校生を対象に「生活実態調査」を実施した。分析の結果、テレビやゲームの時間が長すぎる、家庭での一定の学習時間が確保されていない等の課題が明らかになった。それらの課題に対して、全校的に取り組むことによって、活性化を図ろうとした。

「ノーテレビ・ノーゲームデー」とは、一週間に一日以上、テレビも見ずに、ゲームもしない日を家族全員で決め、代わりに何をするかを話し合い、取り組んでもらう日である。親子団らんで話をしたり、読書をしたり、外で遊んだり、手伝いをしたり、部屋の片付けをしたりと、いろいろな計画が出された。

時期的には、1学期は6月・7月、2学期は11月・12月を、全校的に学校がキャンペーンを張って実施した。学校が主体となって呼びかけると、日頃から問題を感じていた各家庭も、取り組みやすくなると、とても好評であった。テレビやゲームの時間を家族全員で意識するようになった。

	月	火	水	木	金	土	日
13日	14日	15日	16日	17日	18日	19日	
勉強時間	30分	60分	60分	60分	90分	60分	30分
テレビの時間	30分	0分	0分	0分	90分	0分	90分
ゲームの時間	0分	0分	0分	0分	0分	0分	0分

5年生

ノーテレビ・ノーゲームデーはこうやってすごしました。
 家で勉強した。外に出かけたりもした。かえるも
 つかえた。100円もつかえた。

私の感想 わたしは、ノーテレビ・ノーゲームデーは、
 テレビの時に外でいっしょに遊びました。
 家族みんなが、お話をしました。
 車から音楽がでました。
 でも電話は大事。だと思いました。

お母さん
 テレビの音が当に前にならなくて生活の中で、いつもは
 聞こえていた外の音や、カエルの鳴き声も入るようになって、新鮮
 でした。日頃のノーテレビの日を作って、家族の絆を深め
 たいです。

<ノーテレビ・ノーゲームデーの取り組みカード>

b. 学習習慣アップ作戦への取り組み

「ノーテレビ・ノーゲームデー」の取組で、家庭でのテレビやゲームの時間を少なくしていくと
同じような時期に、家庭学習の手引きを低・中・
高学年向けと保護者向けを配布し、「学習習慣ア
ップ作戦」を展開した。

学習習慣アップ作戦

よりよい家庭学習習慣を身につけるためのチェック表

年 組 名前

チェック項目		チェックらん				
		8/27	8/28	8/29	8/30	9/1
子どもが チェック できる	①宿題がなくとも毎日学					
	②テレビや音楽を消して学					
	③言われる前に自分から進んで学					
	④机やテーブルの上など、学					
	⑤机やテーブルの上など、学					
	⑥机やテーブルの上など、学					
	⑦机やテーブルの上など、学					
	⑧机やテーブルの上など、学					
	⑨机やテーブルの上など、学					
	⑩机やテーブルの上など、学					
保護者が チェック できる	⑪子どもが学					
	⑫子どもがテレビやゲームの時間を					
	⑬子どもが学					
	⑭子どもが学					
	⑮子どもが学					

<学習習慣アップ作戦のカード>

「学習習慣アップ作戦」とは、一週間ほどの期間、子どもは自分の学習の仕方をふり返り、保護者も我が子の学習環境に対してふり返る取組である。毎日チェックし、最後に裏に反省を記入する。

子ども自身も学習の仕方をふり返ることができるが、それ以上に、保護者にも反省を書してもらうことによって、保護者自身がよい学習環境を整えようとしていたか、子どもをほめるように心がけていたかなどを反省することができ、とてもよかった。

(2) 授業研究や職員研修の充実

a. 一人が年3回の研究授業

本校では、一人が年3回の研究授業をすることを目標にした。学期に1回ずつの研究授業である。授業研究を充実させていくことが、組織の活性化につながると考えている。

事前に授業公開をする時間を全職員に知らせておき、参観できる職員が参観する。低・中・高学

年それぞれの学年の授業は必ず参観する。放課後には必ず、30分でもいいから研究会を持つようにした。

一日5、6時間も授業を行っている教員の最も重要な仕事は授業作りである。その授業に対して、お互いに見合い、意見を言い合い、よりよい授業をつくっていくために、最大限の努力をしていかなければならない。

b. 複数学級の良さを活かして事前授業、事後授業

学期に数回は全体研究授業を実施しているが、本校は各学年複数学級があるので、研究授業の前に、違う学級で事前授業をしたり、研究授業の後に、もう一つの学級で反省を活かした事後授業を実施したりしている。そうすることで、研究授業がやっただけで終わらず、事前にしっかり検討したり、事後に反省を活かした授業もできていく。

c. 模範授業で授業力アップ

年に2回ほどは、県内外から講師を招き、模範授業を実施している。自分の学校に来てもらって、自分の学校の子どもたちを相手に授業をしてもらい、そして、授業反省会や研修会を実施することは、全職員で研究を深めていくことができ、とても有意義である。

一時間の授業の後、講演会を実施しているが、授業そのものよりも、講演会の方がより実のあることが多い。講師の先生の授業の意図、日頃の思いなどがよく分かるからである。

3. 成果と課題

校長のリーダーシップのあり方について、どんどん自らアイデアを出していくトップダウン式にやるよりも、職員の意見を吸い上げていくボトムアップ式がいいと言われているが、しかし、企業の経営者のように何年もかかって作り上げていくのではなく、2～3年で異動していく校長には余り時間がない。

校長の思い、やりたいことを、いかに押しつけではなく、共通理解を図りながら出していくかを課題としつつ、職員のやりたいこともやれる環境を整えながら、学校としての組織の活性化がもっと図っていければよいと考えている。